

天声人語

戯曲の名作『ゴドーを待ちながら』で知られるノーベル賞作家ベケットは高校時代、ラグビー部の主将だった。故国アイルランドの有力紙によれば、眼鏡なしでは目がよく見えなかったものの「ライオンのように勇猛果敢」な攻めを見せたという▼長く暮らしたパリでも、ことラグビーとなるとアイルランドを熱心に応援。英紙ガーディアンを読むと、ラグビーの試合の放送がある土曜日は、面会の約束を入れないことで知られたそうだ▼開催中のラグビーW杯で、優勝候補と目されるアイルランドが番狂わせを喫した。金星を挙げたのはわが日本である。声援の後押しがあったとはいえ、いったい何人の評論家がこの結果を予想し得ただろう▼日本が逆転した後は、当方も、いつアイルランドが本気を出すか、いつ日本が力でねじふせられるのか、手に汗握った。試合終了の笛が鳴ると、土曜夕刻の本紙編集部にも驚きの声がかたました▼17対145——。日本ラグビーW杯史に残る最多失点である。1995年の第3回大会でニュージーランドに矢のようなトライを浴びた。「記録的惨敗」「次に生かせ、この屈辱」。試合の結果を報じた本紙は、いま読み返すのもつらい。あのころが日本ラグビーの真冬ならば、いまはさしずめ春の初めか、あるいはもう夏の入り口か▼難解な不条理劇で知られたベケットの、今年は没後30年の節目である。ご存命なら、きのうの土曜日、静岡県からの中継を見て、地団太踏んで悔しがったはずである。